

未来を語る、過去を語る

— 関東大震災の言説と作家の体験記を中心に —

阿部 眞緒

(日本文化学専門 / 博士前期課程)

1. はじめに

2011年3月11日東日本大震災ののち、当時の東京都知事、石原慎太郎が「津波は天罰」と発言したのは記憶に新しい。この発言は、すぐに石原自身によって撤回されたが、天災を「天罰」として捉えたいという欲望が現在に残されていることは、注視しなければならないだろう。

こうした捉え方は、1923年9月1日に起こった関東大震災の際にも展開され、論争を引きおこした。実業家の渋沢栄一や作家の生田長江らは、震災を墮落した社会への天罰として捉える言説を残し、それに対し、作家の菊池寛や芥川龍之介、新聞記者の宮武外骨らは手厳しく反論した¹。

また、東日本大震災ののち「いかにして関東大震災から復興したか」といった趣旨の書籍が大量に発刊された。越澤明が、「東日本大震災が契機となって、大正期に活躍した政治家、後藤新平の指導力と業績が改めて注目され始めた。」²と述べるように、過去の復興を参照する動きがある。しかし、成田龍一は、「報道をつうじて「全体」が作成され」、「震災体験を「われわれ」の体験へとつくりかえていく」³叙述が関東大震災の語りの中にあつたと指摘しており、震災の物語化が危険を孕むことを指摘している。こうした状況を鑑みれば、いかにして関東大震災をめぐる言説が編成され、物語化されてきたのかについて考察する必要がある。

¹ この論争に関しては、尾原宏之「「天譴論」を巡って」(『大正大震災——忘却された断層』第一章、白水社、2012年)や筒井清忠「「天譴論」から「享楽化」・「大衆化」へ——関東大震災後の社会意識の変化」(『帝都復興の時代——関東大震災以後』第三章、中央公論新社、2011年)などが詳しい。

² 越澤明「再評価されるべき後藤新平」『後藤新平——大震災と帝都復興』序、筑摩書房、2011年、8頁。

³ 成田龍一「関東大震災のメタヒストリーのために——報道・哀話・美談」『近代都市空間の文化経験』第二章、岩波書店、2003年、8頁。

本稿では、関東大震災をめぐる雑誌報道がいかに関東大震災を捉えようとしたのかを分析することを通じて、関東大震災という物語がいかに関東大震災に編成されていったのかを明らかにする。その際に過去をどのように捉え、語るかということに注目し、作家の体験記という個人的な体験と雑誌の全体報道間の交渉関係について考察する。そして、成田の指摘した、「全体」「われわれ」の語りへと抵抗する語りについて検討したい。

2. 関東大震災をいかに捉え、編成するか

関東大震災の語りについては、先述した成田とともに、尾原宏之とジェニファー・ワイゼンフェルドの論考を参照したい。尾原は、関東大震災をめぐる言説を分析し、震災の記憶が「復興物語の主人公に祭り上げられた「市民」」⁴へと統合されたと指摘した。ワイゼンフェルドは「災害コミュニティ内での相反する視覚的反応を分析し、それらがどのようにして集合的記録へと集約され、国民的物語を形成するに至ったか」⁵を明らかにした。この先行論を参照すれば、成田のいう「全体」「われわれ」の物語は、尾原、ワイゼンフェルドの指摘した東京の復興を成し遂げた「国民的物語」へと統合されているということになる。

一方で、北原糸子は、『大正大震災大火災』という書籍と女性誌における1923年10月の関東大震災特集を比較し、見聞記や体験記が真面目に震災に向き合った記事だと述べている⁶。また、石井正巳は、「個別の体験記だからこそ、記録や統計には見られない人間の真情が現れている」⁷と体験記を評価する。つまり、全体を語る語りの対極として、作家の体験記があると措定している。北原、石井の研究を見かえしたとき、改めて考えなければならないのは、そういった体験記や見聞記がどのような媒体にどのような言葉をつけられて提示されたかということである。雑

⁴ 尾原宏之「空虚な祭り」『大正大震災——忘れられた断層』終章、白水社、2012年、150頁。

⁵ ジェニファー・ワイゼンフェルド『関東大震災の想像力——災害と復興の視覚文化論』篠儀直子訳、青土社、2014年、17頁。

⁶ 北原糸子「メディアが捉えた震災」(『関東大震災の社会史』序章、朝日新聞出版、2011年)を参照。

⁷ 石井正巳『文豪たちの関東大震災体験記』小学館、2012年、8頁。

誌の方針を伺うことのできる巻頭言や他の記事の中に置かれた作家個人の体験記は、何を意味するようになるのか。

もう一つ考えたいのが、関東大震災後の文学という視点である。杉野要吉は、平岡敏雄『日露戦後文学の研究』を頼りに「『関東大震災後文学』の時代」を規定し「捉えてゆく視点」⁸が必要だと指摘し、「機械文明の発達」を鍵語として「関東大震災後文学」を提唱した⁹。新感覚派の表現の変化を震災後の「新たな言語表現の模索」¹⁰したという指摘もされている。しかし、塩崎文雄が指摘したように、この機械文明の発達に馴染むことのできなかつた文壇の中の動きも同時にあった¹¹。これらの研究を踏まえると、関東大震災後の復興を見つめる視線を視野に入れながら、関東大震災後の文学・文壇を含めて関東大震災の言説がどのように編成されていったかを分析することが求められよう。それぞれの震災の体験がどこに位置づけられようとしたのか、概括していきたい。

以後の節では、関東大震災をめぐる言説とそこへ編入させられる作家の体験記について分析することとする。

3. 「機縁」としての関東大震災と天譴論

1923年10月、震災の1か月後になるが、多くの出版社が打撃を受けた中、北原が分析した女性誌（『婦人世界』『婦女界』『婦人公論』『主婦之友』『女性改造』）だけでなく、総合雑誌の『中央公論』『改造』をはじめ、多数の雑誌において「震災特別号」が発刊された。その記事の構成を概観してみれば、災害の様子を伝えるグラビアや記事、帝都の復興をいかになしていくかという論考、作家達の体験記という三つに分類できるだろう。その三つに分類できる記事を総括するのが各雑誌の巻頭言で

⁸ 杉野要吉「『関東大震災後文学』への視点——葉山嘉樹の初期短篇をめぐって（一）——」『国語教室』第27号、1986年4月、24頁。

⁹ 杉野要吉「『関東大震災後文学』史・試論——機械文明の発達と人間の運命」（『社会文学』第8号、1994年7月）を参照。

¹⁰ 十和田裕一「被災した作家の体験と創作——新感覚派の関東大震災」『早稲田文学 記録増刊 震災とフィクションの「距離」』、2012年、244頁。

¹¹ 塩崎文雄「震災復興と文学——『溷東奇譚』の考古学」（『東京・関東大震災前後』原田勝正、塩崎文雄編、日本経済評論社、1997年）を参照。ここでは、復興後に復興前の風景を見つめる永井荷風の視線が分析される。

ある。まず、この巻頭言を分析することによって、各雑誌が関東大震災をいかに捉え、報道しようとしたのかを明らかにする。

どの雑誌においても強調されるのが先述した尾原が指摘したように「未曾有」という言葉が氾濫した巨大災害¹²ということである。『中央公論』では、「前古未曾有の大災厄を弔す」という題目の下で「帝都の現状を前にしながらも、是を正しく理解するの能力を回復し得ざるものである。」¹³とし、この未曾有の災害に対する理解力が不足していることを主張する。そして、未曾有の災害という理解のできない災害に直面したとき、われわれはどうしたらよいのだろうかという言葉が続けられる。

只、我等はよき方面の思想は成るべく長く継続し、悪しき方面の思想は成るべく早く其影を潜めんことを希望すると同時に、人間が今次の災害を機縁として、ます――正しく天地自然の理法に通徹し、ます――明かに人間生活の現実に覚醒し、自然と人間との背反的方面を避けて、其調和的機能を利用するに腐心し、以て生の充実と幸福とを全うせんことを切に祈るものである。¹⁴

復興とか、再建とかそうした退嬰的思想に囚はれず、全然新日本を建設する覚悟を以つて摯実なる精神文明の新建に当面すべきだ。日露役に数倍せる物的損失も、我々の緊張と、我々の努力とを以つてせば何者かあらん。我々は此機にあくまでも大改造の実際戦を担当して宿年の結論を行ふべきである。¹⁵

一つ目の引用は『中央公論』、二つ目は『改造』であるが、いずれも「機縁」「此機」として、震災をよい機会だと捉え、よりよい帝都、社会を創造しようとするものである。この言葉はこれらの雑誌だけではな

¹² 尾原、注4と同掲書、11頁。

¹³ 『中央公論』第38巻第10号、1923年10月、5頁。

¹⁴ 同上、7頁。

¹⁵ 「大国難に当面して」『改造』第5巻第10号、1923年10月、2頁。

く、『大正大震災大火災』といったベストセラー¹⁶にも登場する。

今度の大変災以前の社会状態は、孰れの方面から観ても、明暦の大火以前のそれと似て居る所が多い。(中略) この手厳しい意見、この峻烈なる天罰を、七千万日本人の身代わりとして引き受けられた幾万の同胞に対して、深厚なる感謝の意を表したいといふのはこの意味に外ならないのである。(中略) 必ず読者をして古人の心を心とする機縁たらしめることが出来ると思ふのである。¹⁷

これは、震災を天罰として捉える天譴論的な語りであるが、やはりここでも「機縁」という言葉が使用され、震災以前を改造するために関東大震災があったという方向へと関東大震災の言説をまとめていく。こうした「機縁」を語る語りは、天譴論的な言説と響き合いながら、社会をいかに改造するかという記事の中へと含まれていく¹⁸。

復興の中心人物であった後藤新平は「今まで日本家屋の為に改良に障害を被つて居たところの諸施設殊に衛生的施設を現代的になす機会」¹⁹として震災について述べる。こうした語りは、東京という土地の復興だけでなく、文壇についても述べられる。

今度の凶災が人心に与へた影響の大なると共に、文芸思想の上にも屹度好い刺激を与へることであらう。萎廢沈滞して行きづまつてゐた文壇も、一種の反動作用として、これまでとは異つた方向に発展し、邂逅すると信じて、良い理由がある。われへは大いに意を

¹⁶ 前掲の北原によれば、「初刷り 50 万部とも称される爆発的な売れ行きを示した」書として『大正大震災大火災』があるとする(北原、注 6 と同掲書、54 頁)。

¹⁷ 三上参次「序」『大正大震災大火災』大日本雄弁会・講談社、1923 年 10 月。

¹⁸ ただし、こうした天譴論的な言説には、冒頭で述べたように反論も多かったことを述べておく。宮武外骨は、「自然に生じた吉凶禍福、これを道徳的に解釈するのは、原始民族の恐怖から起こった宗教心の遺伝で、要するに野蛮思想の発露」として断罪し、災害の状況をジャーナリスティックに報道した(宮武外骨「天変地異を道徳的に解するは野蛮思想なり」『震災画報』第三冊、半狂堂、1923 年 11 月。なお、底本は筑摩書房、2013 年、86 頁)。

¹⁹ 後藤新平「帝都復興に就いて」『改造』第 5 巻第 10 号、1923 年 10 月、73 頁。

強くして可なりである。²⁰

これは、『文章倶楽部』の記事の一部であるが、先ほどの帝都の復興をかかげる言説と同様に「屹度好い刺激」として震災を捉えている。

以上のように帝都を壊滅へと追いやったはずの大きな災害は、大きな喪失を抱えていたにもかかわらず、さまざまな面において「機縁」として捉えられることになる。これは、大正期の社会の乱れ、混乱を正すための天罰だという天譴論を下支えとして流布し、帝都の復興をめざすための言説として統合されていく。さらに、震災の被害を前提にした帝都復興の言説を越えて、思想を含めた復興以前の負の側面を変革しようとしているのである。それは、先述した成田らの指摘のように、ここに一つの「国民的物語」が創造されようとしていると言えるだろう。言い換えれば、未来を語るための過去として関東大震災が措定されている。

こうした「国民的物語」を語るための語りは、被災した東京ではなく大阪に中心をおいていた雑誌『女性』においても見られる。『女性』では、「これ決して一地方一都市の災禍ではない。これを小さく見ても国家の一大不幸であつて、これを大にしては正に世界の一大損傷である。」²¹と関東大震災を国家以上の問題として捉えようとしている。これは、巻頭言である「大震災と吾等の使命」においても語られる。

しかし吾等は、徒に現前の悲しみにのみ捉はれては居られない。光は常に暗から生れ、勇氣は多く悲しみから生ずる。吾等はこの傷ついた我が同胞の苦痛を分ち、救済に回復にあらゆる力を尽し、自然が与えたこの一大試練に打ち克ち、更に新たなる文化の建設に貢献しなくてはならない。²²

ここには、帝都に住んでいない人々を復興事業へと参入させる、つま

²⁰ 「凶災と文壇諸家消息記」『文章倶楽部』第8年第10号、1923年10月、103頁。

²¹ 「編輯後記」『女性』第4巻第4号、1923年10月。

²² 「大震災と吾等の使命」『女性』第4巻第4号、1923年10月。

り、国家の復興のために全国を組織しようとする語りがある。1930年以降の戦争における国家総動員体制の土台として関東大震災からの復興の物語があったとも言えるだろう。しかし、こうした未来のための物語は、実際に被災した人々の喪失から奮い立たせようとする語りではあるが、震災から1か月という喪失状況の中、可能となったのはなぜだろうか。

4. 未来語りへと編入される作家の体験記

前節は、未来を語るための言説、「機縁」として関東大震災を編成する語りについて分析したが、本節では、それを可能とした記事として作家の体験記を考える。

少し迂遠ではあるが、作家の率直な言葉が綴られた雑誌である『随筆』について少し述べておきたい。『随筆』は「敢えて震災後の文壇復興の第一声として……なぞとはいはず、「各人各種」の特色を出すことを狙って発刊したという²³。この『随筆』の中では、震災から2か月という時間のため、編集で震災についての論考を提出せよと主張していたわけではないが、作家各人の随筆の中に震災に対する記述が目立つ。

「震災」といふ文字は見るのも厭だ。地震話は聞くのも厭だ。もう飽き〜した。一日も早く震災気分から脱却して、伸び〜した気持ちになりたい。／さう思ひながらのまだ〜容易に震災気分から逃れられさうもない。どこを歩いても震災気分だ。(中略)／こんな際震災について書き出すのは自分でも厭だし、落語家の前座めいて気が射す。ずっと話の本題に入って行きたい。が、それも何だか銜った、わざとらしい気がして落ち着かない。といふのは、私はまだ震災について十分泥を吐尽さないからだ。²⁴

ここでは、震災に対して書きたくないが書かなければ落ち着かないという率直な思いがつつられ、震災の影響から立ち直れていない人の姿が浮

²³ 「同人漫語」『随筆』第1巻第1号、1923年11月、133頁。

²⁴ 中村武羅夫「海村にて」『随筆』第1巻第1号、1923年11月、10頁。

き彫りになっている。飛躍を恐れずに言えば、こうした文筆家の率直な思いの吐露は、現実を捉えきることのできない読者たちにとっての代弁者、ある種の癒しとして存在していたと考えられないだろうか。作家の随筆は、こうした読者の気持ちに寄り添うような語りとしての機能があるだろう。

話を関東大震災の特集号に戻すと、これらの特集号には、作家の体験記が多く寄せられた。先述した『中央公論』『改造』『女性』『文章倶楽部』²⁵など様々な雑誌が掲載する。『女性』では、この体験記を載せた理由を「編集後記」においてこのように解説する。

これをたとえば「文壇名家遭難記」の如き、いまだ嘗てどの方面にも見られない生々しい体験の記録であつて、読者諸氏はこれに依つて今回の災禍の如何に悲惨であつたかを、何ものにも増してよく知ることが出来ようと思ふ。²⁶

震災の「生々しい体験」を知らせるためのツールとして体験記を捉えていると言えよう。作家達もその編集に応えるため、自身の被災経験と震災に対する思いや考えを述べていく。その語りは、前半では、いかにして揺れや火から生き延びたか、そこで何を見たかについて描かれ、後半には、自身が震災をどのように捉えているかということを描くという形になっていることが多い。例を挙げれば、久米正雄は、「鎌倉震災日記」²⁷において9月1日から2日にわたって鎌倉でいかに被災したのかを描き、泉鏡花は「露宿」²⁸において、火に追われて露宿する様を描いている。ここでは、石井が指摘するように「目の前の現実をいかに正確

²⁵ 『中央公論』では、「前古未曾有の大震・大火惨害記録」、『改造』では、「大震災に遭遇して」、『女性』では、「文壇名家遭難記」、『文章倶楽部』では、「凶災の印象 東京の回想」という特集において、作家の体験記が寄せられる。各雑誌において10人ほどの執筆者がおり、芥川龍之介や菊池寛、小川未明など当時の文壇において活躍していた人々が寄稿していた。

²⁶ 注20と同掲書。

²⁷ 久米正雄「鎌倉震災日記」『改造』第5巻第10号、1923年10月。

²⁸ 泉鏡花「露宿」『女性』第4巻第4号、1923年10月。

に描くか」²⁹ということが重要視されている。しかし、全体をみて、「文豪たちは、自分の経験を書いても、震災論へと早上がりするような展開をみせなかった」³⁰とは言い難い。久米正雄の体験記と同じ特集号に載せられた近松秋江の論考は、前節で述べた天譴論を多大に含む内容であった³¹。また、吉江喬松は先述した久米や泉同様、地震から逃げる様子をつぶさに描きながらも、最後には、このように統括している。

罹災した人々の姿と、焦土に化した東京の三分の二の土地とを目のあたりに見た人には、何人にでも安全な家屋の中に生活し得ることはもつたいないほどな心持がするに異ひない。この自然の力の前に協力して、相互救助の心念を強く持つて、生きて行く心持を基礎として、新しき都を築き上げねばならぬ。³²

ここからは、人々の喪失の記憶に寄り添ったはずの体験記が、過去からの立ち直りへの道程を示すものとなっていると言えよう。作家の体験記は、東京の損害のようすを伝えるツールとしてあったと同時に、それが同様の喪失の記憶を抱えた人々の記憶を共有するための記録でもあった。しかし、それらの体験記は、雑誌の巻頭言が関東大震災を「機縁」として捉えようとする語りと重なり合いながら、「天譴」として災害を理解するような言説を含み込み、これを「機縁」に新しい都を作り上げようとする総括へと向かう言説の一部となっている。換言すれば、体験記は人々の記憶に寄り添う語りでありながらも、「機縁」を語るための緩和剤として機能するとともに、甚大な被害をこうむった帝都を読者の前に提示することで、そこから立ち上がろうとする「機縁」をも語っていると言えよう。こうして、喪失した過去を語る語りが、未来を作り上げる語りへと編成されている。つまり、復興を直接語る語りだけでなく、作家の体験記も共犯して、復興という「国民的物語」を作り上げようと

²⁹ 注7と同掲書、8頁。

³⁰ 同上。

³¹ 近松秋江「天災にあらず天譴と思へ」『改造』第5巻第10号、1923年10月。

³² 吉江喬松「震災記」『女性』第4巻第4号、1923年10月、9頁。

していると言える。

そして、次第に関東大震災の喪失そのものを語る語りは失われていった。1年、2年と月日を経るごとに震災記念の特集も組まれなくなる。

この自覚を予め明確にして、如何なる困難をも突破する勇猛と堅忍を欠ぐやうでは、単に帝都の復興に止らず、不詳ながら帝国の前途が危い。未曾有の大天災に加ふるに、此上人間的災禍の爆発があつては、断じてならない。³³

併しそれよりも尚ほ一層憂慮に堪へない点は、非常内閣の現状彼の如きに加えて、只管当面の急にのみ焦心する余り、又は罹災地一点張りの復興と利害にのみ没頭する余り、全国的大局的の高等政策が動もすれば閑却せらるゝことである。人心の安定、生活の保全、惨害の善後は独り罹災地にのみ止まるべきでない、必ず全帝國的でなければならぬことを重ねて特に切言する。³⁴

これは、1923年10月の『太陽』の巻頭言であるが、この切言が示すように、人間的災禍が起こり、関東大震災後の時局の動き——普通選挙法の成立や皇太子の御成婚、大正天皇の崩御など——により震災が忘れ去られていく。復興が速かった分、忘却も速い。『太陽』では、帝国全体の復興を目指す言説が作られているが、この言説とは裏腹に、国民の復興に成功したという記憶だけが残り、喪失や関東大震災をどのように捉えるべきか思案した論争は忘れ去られていった。

5. 過去を思い起こす語り——関東大震災後の泉鏡花文学の可能性

前節では、作家の体験記と復興言説の協同関係について明らかにしたが、そののちに復興はいかに語られていたのだろうか。

ワイゼンフェルドは震災の廃虚についてこう述べる。

³³ 「大災害とその善後（巻頭のことば）」『太陽』第29巻第12号、1923年10月、3頁。

³⁴ 同上。

再建開始前に消去されねばならない廃虚は復興プロジェクトにとってあってはならない邪魔ものであった。大半は震災後五か月以内に撤去された。(中略) この中間的な「復興期」において、急速に姿を消していく廃虚に代わり新たなモチーフが生まれ、崇高の美学は、社会的団結、社会的衝突、社会的変化を表わす新たなシンボルと取って代わられる。³⁵

この指摘と重なり合うように、先述した『女性』では、1925年1月「十年後の東京」という特集が組まれる。

本誌は此処に雄躍一番、ありふれた復興の域を飛び越して、いきなり「十年後の東京」を皆さまにお目に掛けようと企てました。それも「十年後の東京」が面積がどの程度に膨張して人口がどれ位増加し、また区画整理がどう行届いてどんな素晴らしい建築が生まれるだらうかといったやうな、凡そありふれた科学的の常識を突破して、全く芸術家としての自由な空想を遠慮会釈なく誌上にぶちまけて頂くことにしました。³⁶

1年という月日がたったとき、東京の喪失の記憶は未来への希望の語りによって埋められ、復興はもはや空想の対象とまでなっている。しかしながら、喪失の記憶は別の形をとって表出していた。

関東大地震の日からまだ満三年とは経たないのに『健忘症』と云ふ都合のいゝものを多分に持ち合わせてゐる東京人は、恐怖の記憶などはさらりとすて去って手にはダイヤの指輪、仕立て下しの流行着をぞろりと着流して『玄米飯なんてどんなものでしたかね』つて

³⁵ 注5と同掲書、193頁。

³⁶ 「十年後の東京」『女性』第7巻第1号、1925年1月、298頁。

な顔で夏の夜を我がもの顔に散歩してゐる。³⁷

これは、怪談実話というジャンルの読み物であるが、震災の記憶を怪談の形で提示しようとしているものである。震災時の幽霊の話を書いた後の末尾には、「そして遂には『魔の被服廠跡』と呼ばれるやうになり本所には『七不思議』の外に一と不思議を大正の聖代に加へたのであつた。」³⁸というようにまとめ、忘れかけられている震災の記憶を復興の記憶ではない形で記憶しようとしている。こうした記憶は、喪失の記憶をつなぎとめようとするという面で復興の語りへと対抗する可能性をもっているだろう。復興が進み廃虚が消えていく中で喪失の記憶を語ろうとするとき、それは幽霊や記憶といったあいまいな形をとってあらわれてくる。

久米 昔の事を知って、船で往復したものはさういふことを思ひます。あの切立のやうな家が並んで居つた景色はよかつた。

久保田 それはよかつたが、あれに広告をしはじめた、それで大変に悪くなつちやつた。

笠原 昔は気の利いた住宅が並んで居りましたね。³⁹

泉 向島の土堤から待乳山のあたりを見ると何といひますか。満潮で、かう朧月などに汐がさして来ますと、しんみりして来て心中もしたくなるといへたもんですが、所がこの頃にはそんな誘惑は無くなりました。心中、そんなばかもなくなりました。木も無くなりました。⁴⁰

これは、1930年に行われた「大東京復興座談会」における発言である

³⁷ 「夏の夜話 町の怪異（十二）水をくれー水をくれー」『万朝報』1926年7月6日。なお、底本は『大正期怪異妖怪記事資料集成』国書刊行会、2014年、1032頁。

³⁸ 同上、1033頁。

³⁹ 「大東京復興座談会」『文芸春秋』第8巻第3号、1930年3月。なお、底本は『コレクション・モダン都市文化』第5巻モダン都市景観、2004年、177頁。

⁴⁰ 同上、179-180頁。

が、前者は記憶を頼りに東京の以前の風景を語り、後者は土地の記憶を語っている。復興の中に見え隠れする喪失の記憶を蘇らせようとしている。これは復興を作り上げようとする物語へと参入せず、むしろ抵抗するような言説となっているだろう。未来へと向けて過去を語る語りとは別に過去を失われた過去として、現在によみがえらせようとする語りは、復興という「国民的物語」へと抵抗するような言説として存在しているのではないか。こう考えたとき、先の「大東京復興座談会」における泉鏡花の土地の記憶を語ろうとする語りは注目すべきであろう。

一江戸のなごりも、東京も、その大抵は焦土と成んぬ。茫々たる焼け野原に、ながき夜を鳴きすだく蟲は、いかに、蟲鳴くであらう。私それを、人に聞くのさへ憚るゝ。／しかはあれど、見よ。確かに聞く。浅草寺の観世音は八辺の火の中に、幾十万の生命を助けて、秋の樹立もみどりにして、仁王門、五重の塔ともに、柳もしだれて、露のたゝるばかり厳かに気高く焼け残った。塔の上には鳩が群れ居、群れ遊さうである。尚ほ聞く。花屋敷の火をのがれた象は此の塔の下に生きた。象は宝塔を背にして白い……／普賢も影向ましますか。

41

これは、『女性』に載せられた「文壇名家遭難記」の一つである泉鏡花「露宿」の末尾だが、喪失の記憶をつぶさに見つめ、焼け残った過去の記憶を愛おしむ語りである。そして「十年後の東京」が載せられた、1925年1月の『女性』には、「甲乙」⁴²という作品が掲載される。

これは、被災し、家族を失った女性、お由紀をめぐる怪異譚であるが、お由紀の震災体験の記憶は自身によっては語られず、他の誰かによって語られている。つまり、喪失の記憶を誰がいかにして語るかということが問題となっていると言えよう。1925年という震災から月日がたった時点において、こうしたことが問題となっているのは興味深

⁴¹ 泉鏡花「露宿」『女性』第4巻第4号、1923年10月、241頁。

⁴² 泉鏡花「甲乙」『女性』第7巻第1号、1925年1月。

い。「甲乙」の引用で気になる興味深い点を挙げよう。

余り世間では知ませんが、旅宿が江戸時代からの古家だと聞いて来たし、名所料理旅籠だししますから、いづれも由緒あるものと思はれる、従つて古いのです。⁴³

半ばひしやげたまゝに藤棚の方から、すく〜此の屋台を起こして支へた、突支棒の丸太越に三人広縁に立つて三方に、此の干からびた大沼を見た時は何だ焼原の東京が恋しく成つた。⁴⁴

復興がなされていく中の東京で、関東大震災以前と関東大震災当時のことを思い起こさせるような語りには、喪失した土地の記憶を呼び起こそうとする働きがあるだろう。こうした語りが、新たな帝都が完成に近づき、「国民的物語」が形成していく中でなされていたということは看過できない。詳しい分析はここでは行わないが、こうした「国民的物語」に対抗する可能性をもつ文学として泉鏡花の作品群を提起しておく。それは、未来を創造するための過去語りではなく、過去を呼び起こすための過去語りであった。そしてその語りは、幽霊や妖怪、あいまいな記憶と錯綜する叙述によってなされ、失われた過去をいかに描くかという葛藤が現れたテキストとして評価できよう。

6. おわりに

本稿では、関東大震災をめぐる雑誌報道を中心に、関東大震災という出来事がいかに編成されていったのかを分析した。その報道の中では、「機縁」「此機」という表現が用いられ、過去の犠牲を糧に未来を作り出そうとする復興の言説が、これまでの墮落した社会への天罰であるということを主張する天譴論とともに作り出されていった。これは、東京という土地だけではなく、文壇を語る語りにおいても使われた。こうし

⁴³ 同上、583頁。

⁴⁴ 注42と同掲書、586頁。

た語りとは逆に、作家たちの体験記は、被災した際の戸惑いや悲しみ、憤りを体験記として発表した。しかし、こうした復興へと向かう言説へと抵抗できる可能性をもつ作家たちの体験記も「機縁」「此機」という表現が用いられた雑誌の巻頭言に縁どられることにより、未来のために過ぎ去ってしまった過去を思い出し、語るという枠組みの中へと含みこまれてしまった。こうして、震災の痛みを語った作家たちの体験記も復興を正当化する語りの一部となった。関東大震災そのものを語る語りは、その後の普通選挙法の成立や皇太子の御結婚、大正天皇の崩御などの時局の変化により忘れられていき、震災を語ることは復興を語ることへと変わっていった。

こうした状況の中、泉鏡花は関東大震災や災害をめぐる作品群を多く描くとともに、失われてしまった人や東京という土地の記憶を追い求めるような作品を発表していく。言い換えれば、未来のために過去を語っていく時代の中で失われた過去を想起するために過去を語るような語り が用いられていったのである。泉鏡花にとって、関東大震災による喪失はこれまで描いてきた幽霊の消失や物語の不整合を生み出すこととなったが、これは震災による喪失を復興によって解消されない不具合として表現していることに他ならない。こうした泉鏡花の作品群を見直すことは、関東大震災からの復興という国民的物語からこぼれ落ちてしまった語りを拾い上げることになるだろう。自らの想像力の源泉となるものを失ってしまった中、現実をいかに捉え、語るのか。現代の災害をいかにして記述、あるいは記憶することが可能かということを視野に入れながら、こうした葛藤の中描かれた泉鏡花の関東大震災後の作品群を、「言葉を奪うものとしての災害が、想像力に働きかけて生み出した物語学の試み」⁴⁵の一つとして再評価することを今後の課題としたい。

【付記】

引用に際し、適宜漢字は旧字体を新字体に改め、傍点・ルビは省略した。

⁴⁵ 中良子「災害と言葉／物語」『災害の物語学』序、中良子編、世界思想社、2014年5月、4頁。なお、この論考は、東日本大震災を視野に入れながら、アメリカ文学を中心として分析したものである。